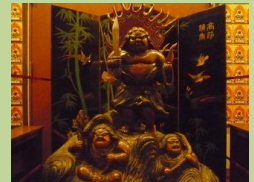


平和の大塔



五大明王

五智如来

撫で不動

昭和 59 年 (1984 年) 建設 大林組による施工

弘法大師 1150 年の御遠忌を記念して建立された、高さ 58m、幅 35.07m の 5 階建ての建物です。

1 階は「霊光殿」

成田山霊光館の一部として成田山に奉納された様々な寺宝が展示されています。また、1150 人の書家による献書を順次展示するほか、床の中央には直径約 1m の香炉の形をしたタイムカプセル「平和へのメッセージ」が埋め込まれており、建立から 450 年後の成田山開基 1500 年 (2434 年) に開封されるそうです。

2 階「明王殿」

不動明王を中心にその周囲を取り囲む形で向かって右前に降三世明王、右奥に金剛夜叉明王、左前に軍荼利明王、左奥に大威徳明王の立像を奉安しています。

高さは不動明王が約 6m、他の四明王は約 4m あり、木造として五体揃っているのは珍しいという事です。これら明王の両脇には「昭和大曼荼羅」と呼ばれる巨大な曼荼羅が掲げてあります。また壁には真言宗や成田山に縁のある大師や大僧正の肖像画などが描かれています。

大きな四天柱には、十六大菩薩と八供養菩薩の全部で 24 の菩薩が描かれています。

また極彩色で彩られた格天井（ごうてんじょう：格子模様で彩られた天井）の美しさには目を見張るものがあります。

3 階「経蔵殿」

中央には、チベット仏教の法主、14 世ダライ・ラマ殿下から寄贈された「ナルタン版チベット大蔵経」をはじめ、インドから日本に至る各国の仏典が収蔵されています。この「経蔵殿」の周囲の壁や棚には御信徒が奉納した何万體もの不動明王御尊像（木彫り）や掛仏（金属）が納められています。

4 階「法蔵殿」

御信徒から奉納された何万體もの不動明王御尊像（木彫り）や掛仏（金属）が奉納されています。

「撫で不動像」も奉安されています。御自分の悪いところをなでましょう。

5 階「金剛殿」

ここは地上約 23m の高さであり、12 本の円柱からなる円形をしています。東西南北にある扉が開いている時は、眼下に広がる成田の景色を一望する事ができます。

中央には「五智如来（大日如来・阿閃如来・宝生如来・阿弥陀如来・不空成就如来）」が奉安されています。壁には「金剛界曼荼羅」を意匠化した模様があり、天井には中央の五仏を象徴した「赤色蓮華文」を描いたステンドグラスがあります。平和大塔の屋根には金色に輝く相輪がありますが、この根本の伏鉢には松田照應上人による平和祈願の銘文が刻まれています。

2階 「明王殿」 (化身)	5階 「金剛殿」 (本地仏)
中央 不動明王 (ふどうみょうおう)	大日如来
東 隆三世明王 (ごうざんぜみょうおう)	阿閼如来
南 軍荼利明王 (ぐんだりみょうおう)	宝生如来
西 大威徳明王 (だいいとくみょうおう)	阿弥陀如来
北 金剛夜叉明王 (こんごうやしやみょうおう)	不空成就如来

十六大菩薩と八供養菩薩の全部で 24 の菩薩

柱一本に六菩薩描かれている

十六大菩薩(じゅうろくだいぼさつ)とは「初会金剛頂経」のなかで説かれる金剛界曼荼羅で、阿閼・宝生・阿弥陀・不空成就の四仏の四方にあらわれる四親近菩薩の総称です。

阿閼如来(東輪)の四親近 ...	金剛薩睡・金剛愛・金剛王・金剛喜
宝生如来(南輪)の四親近 ...	金剛宝・金剛幢・金剛光・金剛咲
阿弥陀如来(西輪)の四親近 ...	金剛法・金剛因・金剛利・金剛語
不空成就如来(北輪)の四親近 ...	金剛業・金剛牙・金剛護・金剛拳

五智如来像

造仏：松久宗琳 截金：松久真や 昭和五八年(1983)



阿弥陀如来像
西
定印



宝生如来像
南
与願印



大日如来像
中央
智拳印



阿閼如来像
東
触地印



不空成就如来像
北
施無畏印

松久宗琳氏が成田山新勝寺の「五大明王像」「五智如来像」の制作にかかり 4年の歳月を費やして昭和58年(1983)完成。又1991年 釈迦堂の四菩薩を制作する。

五大明王は造像史上最も大きく、最高傑作と言われている。

五大明王像彫造に使用された大仏師 松久宗琳の道具一式を仏像の胎内に奉納されました。

また高村光雲の十数点の彫刻鑿も同時に奉納された。

木造 鑄造(ちゅうぞう) 乾漆造(かんしつぞう) 石造

建立から450年後の成田山開基1500年(2434年)に開封されるそうです？

平和の大塔建立(1984年)から450年後は2434年

成田山開基1500年は2440年、しかし開基1000年祭を基準にすると2438年

いずれにしても、開封する年代は少しずれています。何年に開けるのでしょうか？



赤色蓮華文

道標 成田山靈光館入口

世稲荷前

正) 左成田道 左) 右なめかわ道 二里半 右) 此方さくらミち 酒々井町にあったものを移設
当初□□ 文政十亥二月 文政 10 年 (1827)

両界曼荼羅 (りょうかいまんだら)

日本密教の中心となる仏である大日如来の説く真理や悟りの境地を、視覚的に表現した曼荼羅である。

日本密教の教えの中心ともなる大日如来を中央に配して、更に数々の「仏」を一定の秩序にしたがって配置したものであり、「胎藏曼荼羅」(胎藏界曼荼羅とも)、「金剛界曼荼羅」の 2 つの曼荼羅を合わせて「両界曼荼羅」または「両部曼荼羅」と称する。一般に知られる個々の「仏」の像を絵画で表した『大曼荼羅』のほかに、1 つの仏を 1 文字の梵字 (サンスクリットを表記するための文字のひとつ) で象徴的に表した『法曼荼羅』や、1 ずつの仏をその仏の内証を象徴的に表す「三昧耶形」で描いた『三昧耶曼荼羅』日本ではインド密教古来の地面に描く曼荼羅の姿に倣って仏像を伽藍内に配置したものを『羯磨曼荼羅』(かつままだら) といいこれらを総合して「四種曼荼羅」と呼ぶ。

松尾栄画伯

成田山新勝寺の「平成大曼荼羅」を図画したことで名高い、仏画家・松尾栄画伯の作です。平成 10 年 (1998 年) の成田山開基 1060 年・開山寛朝大僧正 (916-998 年) 1000 年御遠忌の記念として格天井に松尾 栄画伯により、華麗なる百華図あり。



裳階 (もこし)



石山寺多宝塔 (国宝)、鎌倉時代初頭、

日本最古の木造多宝塔



「大塔」方五間

68m

初重と二重の間に「亀腹」と称する漆喰塗りの円形部分

越前大仏 清大寺の五重塔は高さ 75m 380 億円 1987 年相互タクシーの創業者多田清の手により建立された。
但馬大佛 長楽寺の五重塔は高さ 68m 多田清寄進

【亀腹】 かめ - ばら

建築物の基礎部分、多宝塔の上下両層の間、鳥居の柱脚部などを、白漆喰(しろしっくい)などで固めてまんじゅう形に造ったもの。

五 大 明 王 平和の大塔(2階)

五大明王とは、五大尊・五大力・五忿怒とも称し、不動明王を中心として四方に位置する降三世明王(東)・軍荼利明王(南)・大威徳明王(西)・金剛夜叉明王(北)の総称であります。



だいいとくみょうおう
(西) 大威徳明王



こんごうやしやみょうおう
(北) 金剛夜叉明王



不動明王



ぐんだりみょうおう
(南) 軍荼利明王



ごうざんぜみょうおう
(東) 降三世明王

上記写真の五大明王の仏像は成田山平和の大塔の物とは異なります。

明王は、それぞれの如来の化身である。

降三世明王はヒンドゥー教の最高神シヴァ神とその妻パールヴァティーを踏みつけている。

不動明王	中 央		大日如来の化身
金剛夜叉明王	北方に位置	顔が三面、腕を六本、目が五個有している。	不空成就如来の化身
降三世明王	東方に位置	顔が四面、腕が八本あり。	阿闍如来の化身
軍荼利明王	南方に位置	八本の腕を持つご尊像である。	宝生如来の化身
大威徳明王	西方に位置	顔が六面、腕と足をそれぞれ六本づつ有している。	阿弥陀如来の化身

(水牛に乗っている) (頭の上にも三つの顔がある)

昭和 60 年 (1985) 京都大仏師松久宗琳が彫造した五大明王像

昭和 60 年(1985)には、千葉の成田山五大明王像の彫造に使われ朋琳・宗琳の手で不動明王像の胎内に光雲の彫刻鑿が奉納され、千年のねむりにつきました。

五大明王像彫造に使用された大仏師 松久宗琳の道具一式を仏像の胎内に奉納されました。

道具一式は、5ヶ月の歳月をかけて光雲彫刻刀鍛造所に於いて数百本の道具を製作いたしました。

松久宗琳

成田山の五大明王像

昭和60年、京都大仏師松久宗琳が彫造した五大明王像の開眼法要風景。



松久宗琳（彫）平成4年3月15日没

延暦寺東塔五智如来像、大阪四天王寺丈六仏等を制作したほか、京都仏像彫刻研究所を設立するなど仏像制作の普及、教育にも尽力した仏師松久宗琳は、平成4年3月15日京都市の自宅で死去した。享年66。大正15（1926）年2月14日、仏師松久朋琳の長男として京都市下京区に生まれる。

昭和13（1938）年、尋常小学校を卒業して仏像彩色師八木秀蔵の内弟子となる。一方、日本画も学んだ。同15年12月、脊椎カリエスを患い実家に戻る。この病気により右脚の自由を失う。

同16年仏師を志し奈良、京都を巡って飛鳥、白鳳、天平時代の仏像を研究。同19年10月、陸軍の要請により成吉思汗像に金箔を施す為渡満し翌月帰国。同年12月京都高島屋の家具製造部員として再び渡満して翌年3月帰国する。戦後の同23年、木彫家佐藤玄々に入門。同25年陶芸家河井寛次郎のもとに通い、以後も交遊を続け、「用の美」等、芸術概念をはじめ多大な影響を受けた。同年父朋琳と共に愛媛県出石寺の「仁王像」を制作し、鎌倉時代以降希少となった「賽割法」を復活させた。同36年より宗琳を名のる。

同37年、京都市山科区九条山に「京都仏像彫刻研究所」を設立し、工房による仏像彫刻の制作を目指す。

同38年、戦災で失われた大阪四天王寺の「仁王像」を制作。同38年滋賀県延暦寺の「智証大師像」「聖徳太子像」（父と共作）を制作。同48年、京都山科区大宅に工房を設立する。同50年、京都大覚寺「五大明王像」を父と共に制作し、翌51年、京都金閣寺の「岩屋観音像」「四天王像」を制作する。同53年大阪四天王寺大講堂の「阿弥陀如来像」、同54年同寺太子奥殿の「聖徳太子像」「四天王像」を父朋琳と共に制作し、同寺より「大仏師」の称号を受けた。同55年延暦寺総持院の「五智如来像」を父と共に制作。

同58年（1983年）千葉成田山新勝寺の「五大明王像」「五智如来像」の制作にかかり、4年を費して完成。同寺より「大仏師」号を受けた。同寺には、平成3（1991年）にも「千手観音像」「弥勒菩薩像」「普賢・文殊菩薩像」を制作している。同59年1月、インドへ、同62年5月中国桂林へ、平成元（1989）年5月中国雲崗石窟へ赴く。晩年は国内の古寺をも多く訪れた。天平期の仏像を好み、天平仏の研究を基礎とする鎌倉期の仏師快慶を崇拝し、義軌や古典的様式を守って、流麗な像様を特色とした。個人様式を重視する近代の芸術観に対し、長い仏教彫刻史の蓄積が生んだ古典様式を貴重な遺産と見て踏襲する姿勢と共に、工房による制作を大規模に展開した点でも注目される。一方で、仏像制作を広く一般に普及させるべく、昭和39年に第1回宗教美術展を開催。同40年代前半には彫刻刀の電動研磨機を開発。同48年「宗教芸術院」を創設して講習会を開くなど一般への教育につとめた。著書も多く、『仏像彫刻のすすめ』（昭和48年 日貿出版社）、『仏像彫刻の技法』（同51年 同社）、『仏画と截金』（同52年 中川湧美堂）、『新しい仏像彫刻』（同59年 日貿出版社）などがあり、作品集に『松久宗琳の仏像彫刻』（同63年 秀作社）、『大仏師 松久宗琳』（平成4年 光村推古書院）、伝記に『日本人の魂を彫る』（長尾三郎著 平成2年 講談社）がある。作品の多くは、昭和60年に設立された松久仏像彫刻会館（京都市中京区御幸町三条下ル）に安置されている。

成田山は彫刻の宝庫

江戸彫工の源流である鳴村家元祖鳴村俊元の倅・二代鳴村圓哲から八代鳴村俊表又江戸彫工御三家の作が多数あります。江戸彫工御三家とは(鳴村家・石川家・後藤家)である。



創業百余年の歩み
光雲の奉納鑿

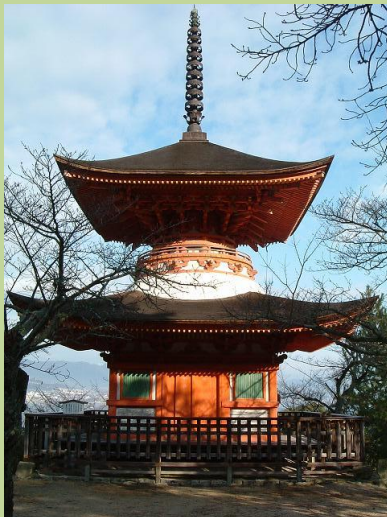
高村光雲を師と仰ぎ伝統ある技術で鍛造された「光雲の彫刻刀」は明治、大正、昭和、平成時代を経て創業百余年を迎えることが出来ました。昭和五十三年、大仏師 朋琳・宗琳が大阪四天王寺ご本尊を彫造。つづいて昭和五十九年、成田山新勝寺のご本尊の彫造に役割を果たしました。「光雲の彫刻鑿」数十本が大仏師の手によって仏の体内に納められ永遠の眠りにつきました。



胎内には不動明王の本地仏(教えの根本となる仏)である胎蔵法の大日如来と彫造願文が納められています。又、五大明王像彫造に使用された大仏師 松久宗琳の道具一式を仏像の胎内に奉納されました。



二階明王殿には真言八祖と、その行状絵図が描かれている



多宝塔(方三間)



大塔(方五間)

左の塔は方三間(柱が4本で柱間が3ヶ所)である為**多宝塔**と呼ばれる。右の塔は方五間(柱が6本で柱間が5ヶ所)である為**大塔**といいます。成田山の塔は大塔です。

二階の明王殿内部



塗香（ずこう）が壺にあります。
「この香を両手に塗り心身を清浄にして
御本尊様に礼拝ご祈願下さい」とあります
お不動様の前に正座して静かにお参りしましょう。
塗香は大変香りが良い



五大明王は「**賽割法**」により制作された。不動明王像は**43個**に分割されています。
運慶が始めたのであるがしばらくの間途絶えていた、この技法を大仏師松久父子が復活させた。
不動明王の胎内には大仏師 松久宗琳の道具一式[光雲の彫刻鑿]が奉納されている。また
内部に入るには外階段は上らないで一階入り口から入り左に行きます。靴を脱いで二階に上がり
運がいい時は五階まで上がることが出来ます。二階まではいつでも上がることが出来ます
272.7cmの坐像で火焰を含めた総高は6mをこえる巨大な尊像です。
賽割法という工法を用いた43の部分からなる寄木造りで、岩絵具を約100種類使用した上に
截金（きりがね：金箔を細かく切ったもの）による装飾が施されています。胎内には不動明王の
本地仏（教えの根本となる仏）である胎蔵法の大日如来と彫造願文が納められています。
胎蔵法の大日如来の教えを姿かたちで現しており、火焰はカルラ鳥という毒竜を食する鳥のかた
ちをしているので、**カルラ焰**とも呼ばれ、**人々の煩惱を焼きつくすことを意味**し、このことから
智慧の焰といわれています。
右手に持っている剣は、煩惱を断ち切り、左手に持っている索は、すべての人々を包容し、すべ
ての障礙（しょうげ：障害・妨げ）となるものを縛って自由自在に活動することを現しており、
座っている岩は何事にも動じない悟りの心の強さを現しています。額のシワは悪魔に対して怒り、
人々を思いやる心を現し、左眼を半眼に閉じているのは、左道（誤った道）を封じて正しい道に
入らせることを表現しています。牙を出しているのは、あらゆる困難や障礙を噛み砕く姿を、口
を閉じているのは、無益な言葉を発しないことを各々象徴しています。